

- \* 「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」(エペソ6:18) サタンと闘うために必要な武具の最後に「祈り」がある。これは最も大切は武具といえる。私たちが神とつながっているためには祈りが欠かせない。その祈りは「御霊によって」祈る聖い祈りが求められる。神のみこころを求める祈りであり、神が喜ばれる祈りである。
  - \* パウロはまた自分のために祈って欲しいという。祈りが必要ではないと思われるほどの大伝道者であったが、むしろ自分の弱さを認識していたので、他の信徒の祈りを求めた。「私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」(6:20) ローマの獄中にいたパウロの祈りの内容は、早く牢獄から出られるようにではなく、また、権力者たちが倒されるようにというものでもなく、ただ福音を大胆に語る事ができるようにというものであった。  
日本でも戦時中、語るべきみことばが制限されたことがあった。今なお世界ではキリスト教迫害によって自由にみことばが語れない地域がある。また、自由が与えられていても、語るべき福音が正しく、大胆に語られているかが問われている。牧師、宣教師のみならず、私たち一人ひとりが「福音の使節」として、この世に遣わされていることを改めて認識したい。
  - \* パウロの宣教は、近くに同労者や忠実な奉仕者がいなければできなかつた。この「エペソ人の手紙」を携えてきたテキコのように、パウロや他の教会の現状を細かく知らせる協力者がいたからこそ、福音は広がっていったのである。その基になったのは、お互い離れていても主イエスを信じる者たちがこころ一つになって祈り続けていたことにある。
- ドイツでナチスに徹底的に抵抗して投獄され、終戦の一月前に絞首刑になったD. ボンヘッファー。「良き力にわれ囲まれ」という讃美歌は、獄中からの手紙をもとにして書かれたが、この手紙には彼の強い信仰と希望と仲間たちへのとりなしの祈りがあり、心打たれる。